

ものうく思ふにこそとて、寺に歸り衣服を人に持たしめて、彼の乞食の方へ遣はしたりけるに、さきに在りし處に居らず。其邊を周く尋ね求むれども、何方へや去りたりけん。其影だにも見えず。其人歸りて、其由を申しけり。普門是を聞き、嘯嗟嗟して追賞し、其後々もしたふといへども、再び求むる事を得ざりき。といへり。享保紀聞には、高巖寺普門和尚は、毎夜寺内を獨りつとめて廻られしに、或夜門前の乞食二人いさかふ音しけり。何事やらんとたゞずみて聞かれしに、一人の乞食大根を一把持ちて居るを、今一人の乞食咎めて曰く、一二本は貰ふ事も有るべし。一把共持つ事、定めて盗みたるにて有るべしと云ふ。一人の云ふやう、是は晝去る所にて大根を洗ひたる手間に貰ひたり。筋なき事にあらずと云へば、よしや貰ひたるにもせよ、我等さへ不審を立つる也。若し人の見ば、疑はぬといふ事有るべからず。久々同じ處に枕を双べ居たれども、明日より立離るべしというて、しづまりぬ。果して、其翌日より一人の乞食は見えざりき。其後年經て、普門和尚は隱居して卯辰山邊に庵を求め住まれしに、或時彼乞食見ければ、

久々何方へ行きて居りしぞ。今よりは我が庵に来て居よ。食のあまりにてもくれんと被申ければ、忝しというて、夫より庵の臺所の場に居住し、半年許も暮しけり。或時和尚に云ひけるは、久々御厄介に成り、有がたく奉存。又外へ参り候と暇乞しけるを、和尚止まれと云はれけれども止まらずして、行方不知なりぬ。其後二三年も過ぎて、和尚雪中に極樂寺へ見廻に行かれし處、寒風はげしく雪降りける門の下に、一人の乞食書物を読み、うづくまり居けるが、ふり仰ぐを見れば件の乞食なり。和尚詞をかけ、久々に逢ひたり。何方に居たるぞ。また今見て居る書物は、いかなる物ぞと問はれければ、是は子供の拾ひ來る草双紙なりとて隠すを、無理に取りて見られければ、碧巖の要文の所なり。和尚甚だ驚き、我等見誤りたり。是非我等方へ來られよ。追付迎を可遣と契約して歸られ、其儘衣類などを爲持人を遣はせしに、また何方へ行きけん見えず。金澤中をば尋ねさせられしかど、終に其行方不知とぞ。蓑輪氏話也。至極の隱者なるべし。とあり。兩傳説孰れか正説ならん。撰集抄・沙石集などにかゝる事多く載せたり。

○祠堂地藏堂

高巖寺境内にあり。昔より祠堂の地藏と稱し、木像の古佛なり。地藏應驗新記に、此の地藏佛は、美濃國池田郡八幡村竹中氏の、延寶二年に江戸へ赴きし時、靈驗を感じたる事などをば記載せり。

○高巖寺古松

門内にあり。龜尾記に云ふ。高巖寺境内なる古松は、昔宮腰古街道の頃の並松也。其のさきは、此の境内より今云ふ古道へ一續きの道路なりしといひ傳へり。又同寺地藏堂の前なる梅の木は、一柳監物君の自愛ありし植木の一木也。といへり。

○辰姫墳墓

高巖寺卯塔場にあり。辰姫は中納言利常卿第七息女なり。生駒氏家譜に、三代内膳直方三男右近直政幼名牛助の母は、佛光寺經海僧正の娘にて、名を五條と稱し、利常卿被召仕松姫出生す。其の後又懷妊の處、内膳直方に賜はるべき旨命ありて、慶安三年七月廿七日松姫と共に入興し、同年の暮直方居邸にて辰姫出生の處、承應三年三月三日五歳に

て早世、法號花溪智清童女、高巖寺にて葬送あり。明暦元年十月七日直政出生、即日五條卒。とあり。今辰姫墳墓の傍に、生駒内膳直方暨び内室五條の墳墓並びあり。五條の墓碑面に、靈梅院殿花巖妙香大姉、明暦元未十月七日。と彫刻せり。寺中傳來の古文書中に、左の一紙あり。

口上之覺

一、微妙院様之小姫様御母公者、佛光寺門跡之息女五條殿と申也。松平越中守殿之御簾中陽春院様同腹之御妹花溪智清童女俗名おたつ様、承應三年三月三日御歳五つに而、生駒故内膳方にて御早世被遊候。

一、御墓所は當寺境内に土葬に被仰付候。尤御位牌被立置候。御墓所之柵・塔婆及破損申節は、以先規修理被仰付候。

一、御中陰并御年忌之時分、微妙院様御在世中者、津田故玄蕃御意を以、米五十俵宛に而、御茶湯被仰付候。

一、陽春院様御在世中は、毎年七月爲御手向料金子一兩、江戸より御局吉川之狀を被相添、御會所より傳達被成候。

一、五條殿生駒故内膳の婚儀被仰付候。御姫様内膳方に